

## 小笠原寫生旅行〔四〕

丸山晚霞

扇村

大村より二見灣を隔てた西南の對岸、桑の木山の麓、扇浦の海岸より連樹谷に亘りたる村落を扇村といふて、父島第二の大部落である。大村より陸行すると二里餘の險路である、が風ぎたる日は大村より扇浦通ひの渡船があつて、航路は約一里である。大村の宿に居ると、埠頭のあたりで時々法螺貝を吹きたてる、これは通ひ船の出帆する合圖である、最初はこの合圖があると早速出かけて乗り込んだ、が中々船を出さない。通ひ船といへば優美に聞こゆるが、實際こゝの通ひ船は希代の老船で、おそらく開島以來のものであらう、修繕に修繕を加へて寄木細工の如く、元形は全く消滅して外部は黒ペンキを數十度も塗り改へたらしく、水に浮て居るのは寧ろ不思議で、風た灣内ではある、がこれにて人間が運べるかと思はるゝ程である、そして船人はといふたらこれも希代の古物で、米の齡ひに手が届く程で船とよく調和して居る。初めて乗つたときは、水練の素養無き余には安心が出来なかつた、その上この老船人の氣長なるに驚かずには居られない、乗り込んでから二十分、四十分、一時間待つが中々船を出さない、乗客か如何に急ぎかけても平氣なもので、忘れた時分には又貝を吹く、一人乗客が加はる、まだ出さない、又三十分、一時間、又貝を吹く、乗客が又一人加はる、

午前七時三十分に乗りに込んで、十一時になつてもまだ出さない。あまり退屈であるから埠頭に上りて制札を見ると、渡船の定貨と一人たりとも渡船する事、とは定規が明記してある、が制規を以て責むるは内地の事で、この島の凡ては制規外の島の約束で行はれて居るから、未だ島の的に化せられない余等は痛癢が起る、が自分がこの島に來た目的は、島の閑散に浴さんためであるから、島の約束の閑散は喜んで受けねばならぬ、かう考へを廻らすと、制規を破つた島の約束が嬉しくなる、扇村に急用があるでもなく、到る處は皆研究の材料である、この濫褻船の中に一日居るのも面白い、と自分だけ悟つた、が余等と内地より同船した新來の手合もこの渡船にあつて、痛癢を起してブイブイいつて居る、あとからあとから乗りこむ連中は皆この島永住の人で、貝の音を聞てから事をすまし、それから晝寢をすまして來たのだ、貝の音の合圖を正直に解して、早く駈けつけたのは皆新來の人々である、新來の人々も永く居るうちには終に島化するゝのである。漸く船は岸を離れた、このときは十一時半であつた。櫓を押す船人の掛聲は大したものである、が船は更に進まない、風が無から帆を用うる事は出來たい、船は同じ處にクラクラ動て居るのみだ、このぶんでは約一里の海上、扇浦に着くのは今日中には無圖かしいかもしれぬ、悟りますした余は遅くも早やくもよい、一日かゝつても二日かゝつて到着しても、余にとりては何れも可である。二見灣内の風光は絶美である、波平にして湖上の如く、水は透明して珊瑚礁の細かき枝幹茂り合





ふて、白銀もて作り森林を見る如く、色彩麗はしき小魚は小鳥

其餘波が灣内に突進して来て、余等の乗れる濫褸船は水の入ら

の如くその間を遊泳して居る、譬へば海底の銀山の如く、山には高低ありて、高きは峯、低きは溪谷、自分は輕氣球に乗じてこれ等の奇景を瞰下しつゝ、走るかの如くである。海の深淺と空と四圍の山岳との關係より、海面は種々の美彩を放ち、又は波紋の奇形等に興を湧かし、美の水美の山を眺めつゝ靜かに船を浮べて居る、これならば十日かゝつて對岸に着しても不平は無いのである。同じ處に動て居る様に思はれた、が段々大村を離れて扇浦が近くなつて、金目岩や野羊山が近くなるは不思議だ。海も深くなつて底が見えない。無風であつた、日も灣口より風が吹て来て、鏡の如き灣内も波に破れて船は動搖を始めて船暈を感じた、大村の船見山と扇村の野羊山との間が迫つて、そこが灣口で船見山に近いところに立つ岩がある、灣内に入る船の目標となつて歡迎岩と呼べる。其附近に暗礁多く、外海より送らるゝ怒濤はすさまじい勢を以てそこに碎け、



六 橋 三 平 筆

んばかりに傾いた、かうなると風景どころではない。船暈どころでない。泳ぎの出来ない余は罵倒した老船人を命の綱と頼んだ。老ても船人である、斯道にかけては名人である、これ位の波は平氣のもので、風を待つて居つたといふ態度で靜かに帆を巻き揚げた。今迄猫のやうであつた船も急に虎の如く、矢の如く走つて大小の波を乗り越へ、東の間に扇浦に着いた。

扇浦は一帶の砂濱でしかも遠淺になつて居る、海水浴場として無二の好適地である。船を下り白砂を踏みて扇村の町に出た。此島は時々強風烈しきため、海岸に沿ふて建てられた人家は必ず風防林を廻らして居る、が扇村は地理の關係上強風を避けらるゝためか、内地の漁村の如く海岸を廻らして人家が建てゝある、風防林が無いから、海岸に面した家の裡より居ながら灣内の風光を展望することが出来る。扇村の町は

單に海岸通りの一筋で、大村の町よりは狭く、凡てが不規律で大

小の樹木等繁りて、家も人民も皆素朴で島の閑散の趣きが充分に現はれて居る。島生活の状態に材を求むるには扇村である。無事に苦しむ様な氣長連中の群れてゐる町を二丁餘り行くと、桑の木山の連樹谷より流れ來たる小河がある、こゝに架した板橋を渡ると大きな森がある、森の中には小學校、分署、村役場、寺院等がある。今日扇村に來た目的は、先の日今日の午前八時に訪問すると約した友を尋ねるためである、友は東京の牧師遠藤千浪といふ人、昨年來より病癒療養の爲めこゝに滞留し、傍ら布教に勤め多くの信者を有してゐる、吾等にも頗る親切にて萬事の便利を興へてくれたのである。この日も二子山より洲崎方面を案内するといふのであつた、氏の清居を訪問したのは午後三時、約束したのは午前八時、七時間も違約してゐる、余は流石に心苦しければこの罪を謝した、が氏は頗る平氣で余の遅れたのは寧ろ期して居つたらしかつた、一年有餘の島生活に化されたのであらふ。余がために新鮮の香蕉と檸檬湯を饗した。

## 二子山

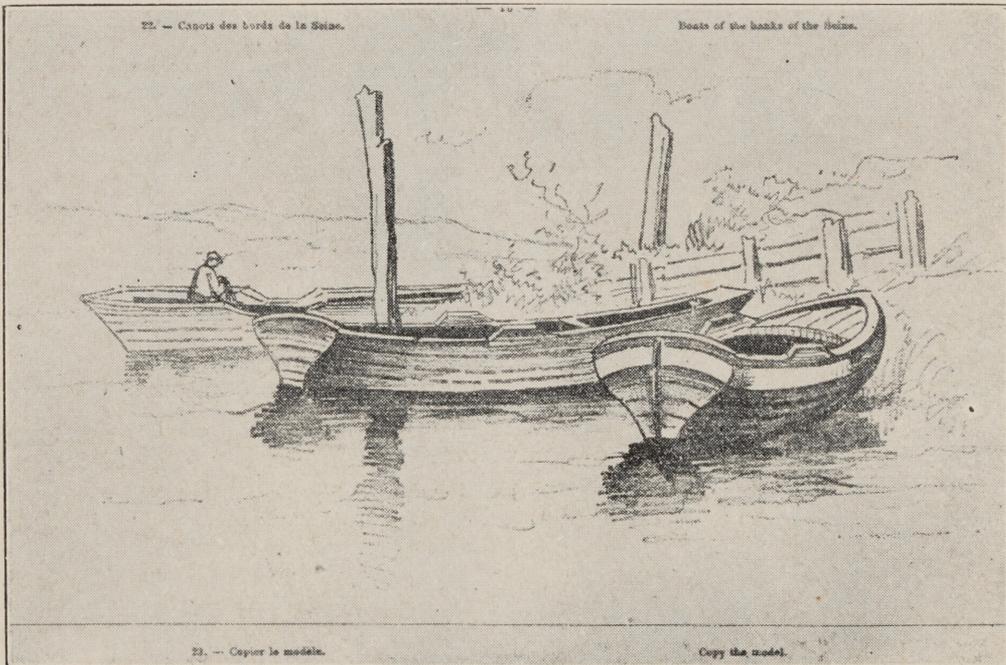
共に携ふて千浪氏の清居を出てたのは三時過ぎてあつた、扇村の山に傍ふたる裏通りをぬけて行くと、そこには小さき小舎が軒を列べて建てゝある、人々は島産物のパンダナスの葉にて種々の細工ものをして居る。縁蔭深き坂路の中段に共同使用の井戸がある、父嶋一等の清水が湧出し、遠く大村よりも飲料としてこの水を運ぶのである。坂の極る處は、先の日北袋澤方面に辿りし現はれ峠の大路である、この邊の木立より連樹谷に亘れる

緑の中に鶯が頻りに啼て居る。路は右折してこゝより二子山である、赤土の路を登り行くと、路傍に印度竹及び椰子樹が並木の如く列植してある。二子山には鍋島某の開墾場がある、先づこゝに案内された、規模廣闊殖産事業の見る可きものが多い、が自分は佳く繁茂したる甘蔗や香蕉畑より、南洋の植物を蒐集して移植した氏の庭地には興を満たした、奇しき植物には奇き花奇しき實を着けて一種の香氣があふれて居る、家は皆島の掘建てで大きく土間廣く、そこには種々の農具等散在し、家禽家畜は所々に群れ、飼養の婦は單帶素足にて飼料を運んで居るさまは實に好書題である。後庭に出づると檸檬、ザボン、佛手柑、夏蜜柑等豐熟して、黄金の實は地に着かんばかりに垂下して居る。蜜蜂は午後の日光を浴びて花より花に群れ、芝生の丘にある數十の箱に彼等は飼育されて居る。丘の前には澤があつて、大なる實を着けたる香蕉茂り、これが澤なりに長く續て、それに沿ふたる道を下り行くと、パンダナスの葉を製造して居る小舎の前に出た、一群の男女が頻りに働いて居る。こゝより澤を横切りメリケン松の小山を登ると、島廳の珈琲試作場に出た、この附近一帶は皆珈琲を栽培して、今は熟期で、實は赤珊瑚の珠を着けたる如く美はし、園守の語る處によると、本年は風害のため好果を得ざりしとの事、殊に成熟期には、夜になると百數十の大蝙蝠が群集して實を食求り、これ等の害を蒙る事多大との事である、實の採取は多く婦人を使ふので、園内各所になまめける唄の聲が聞こゆる。こゝを辭して某の砂糖製造所に立寄り、甘蔗

數本を求めこれを嚙みながら現はれ峠に出て、扇村に歸たのは午後六時頃であつた。この夜千浪氏方に泊し、清談夜を更し、扇浦に寄する波の音を聞きつゝ心地よき寢に就いた。

洲崎

翌日晴起床のときは旭日軒端に輝き、後庭の竹林に鶯が鳴て居つた。この島には得難き清水にて顔を洗ひ、海岸に出で、新らしき空氣を呼吸し、茶も甘く朝餐も甘く喫した。今日は洲崎に案内するとの事、午前七時に發す、昨日經し路をとりて二子山より右折し、雜草の間なる小道を迂曲して下る、この附近一帶の雜草に混じて數種の草花咲けるを見る、草花はこの島固有のものにあらずして凡て舶來種である、これは蜜蜂飼育上この附近一帶に鍋島氏が播種せしものと。小流に沿ふて下ると平坦の地に出づる、甘蔗畑の間を行くとそこに樹木又は大濱萬年草等密叢して、人家二三歸化人の住みたる如き家もある、林を出づればそこは一帶の沙濱、正面は野羊山である、同山は内地の江の嶋の如く、そこ



に行くには幅四五間の沙濱長く續き、その兩側は一方二見灣他

カ ツ サ ン 氏 筆 臨 本 の 内

方外海より波濤が打ち寄せて居る。二見灣に面せる處に正方形の大なる岩がある、怒濤これを打ちて白波數丈の高きに飛ぶ奇觀に接す、それより大小の石散點し、退潮の時であつた、め石を傳ふて波打ち側まで辿つた、所々潮水のたまりに奇しき動物が居つた、小團の體より四本の五六寸又は八九寸程の細き脚を出だし、その脚は一面に二分程の刺を生じ、靜かに水底を這ふて居る、海栗の屬にやあらん。野羊山には洞穴ありて、内部廣く小舟にて探ぐる事が出来るとの事なれど、冬期間は馴れざるものには危険との事故、これを探ぐる事を見合はせた。一方の外海より打寄する方は一小灣を爲して居るため、波も靜か砂濱となつて居る、其附近には濱晝顔の花等が咲て居つた。美しき貝奇しき岩石等を採集し、濱遊びの歡を盡して扇浦に歸れば、濱には丁度大村行き便船があつた、再遊を順風に帆を張り、血氣に充ちた船人三人、

船も安全なれば矢の如く走り、一里の海上三十分にて大村の埠頭に着き、宿に歸つたのは午前十一時であつた。この日午後より船見山にて二見灣を寫生した。

## ピーター、デ、ウイント〔七〕

青 人

概していへば、デ、ウイントの生涯は間斷なく仕事を續けゝるなりけり。氏は空想に時を費さざりき。金錢を獲んが爲めには終日それよりそれと仕事を續け居たりき。一八三九年十二月三十日にヒルトンの死去せしが爲に打撃を蒙りしかども、氏が嬉んで従事しける非常なる勉強の仕事も左程長くは妨げられざりき。それよりして直にかゝる過勞が氏の健康に關係し來りぬ。氏は短慮となり來りぬ。性質刻薄なりしかば、初對面の人には好く嫌惡せられつゝありき。一八四三年にニューフォレストにて寫生しつゝありける折、氣管枝炎にて殆ど死に垂んとして、倫敦へと送られぬ。氣管枝炎再發三發して、身體の衰弱甚しくなりもて行きぬ。かゝる事には頓着なく、一八四八年より四九年の冬に至るまで間斷なく働かしかども、其年の春に至りて、漸く展覽會への出品畫を送る程に力附けるなりき。一八四九年六月三十日遂に六十六にて此の世を去りぬ。死骸はサヴオリーの會堂地に埋葬しぬ。蓋しこゝにはヒルトン及同夫人及母君の埋葬地なり。

サー、ウオーター、アームストロングの説に依れば、デ、ウイントは中身丈にて疲軀に色黒く、頭髮は若き頃は黒かりしとぞ、デ、ウイントの孫娘エツチ、エツチ、タツトロツグ嬢の蒐集しけるデ、ウイントの縮圖の肖像を見るに、氏の執拗にして不動なる面影の現はれ居るなり。此の不動の様が氏の性質を知るの基なるべし。氏が金錢に愛着しけるは、節儉と金貯とに負ふ處多大なりしかども、徃々にして此二徳を裏切ることありき。例之ば氏が嘗て、生徒の紙の端に雌牛を數匹描きしとして、一課一ギニーの上に二十五シルリングを追徴しけるとぞ。氏は氏一個人の展覽會を自己の畫室中に開きて、人々に縦覽を許しけるが、なかなかの商賈人にて、賣らんと欲する畫には必ず白紙の附箋を爲し置きぬ。富豪の友人の一人が何時も、何れも佳作なりとて、これに賣約濟の記號を附すること慣となりき。デ、ウイントはかゝる工風に飽きて、別策を案出しぬ。さて個人展覽會の日來りぬ。例の友人來りて、狂喜の様にて附箋したる繪畫の前に進みて曰く、『さてデ、ウイント君附箋の繪畫は擧げてわが所有たらんことを望みけるを、悲むべしかく賣約濟とは』と。畫家は友人の肩を扁手もて叩きながら、曰く『貴處のお氣に入らんを慮りて、貴處の爲に附箋し置けるなり』と。また繪畫の値段を幾ギニーとするの癖ありき。或時從者の異議を挿みて曰く、『デ、ウイント君よ、今日ギニーてふものなし、宜しくパウンドとせんか』『されどわが値段はギニーなり』成程貴處もシルリングのはしたを争さふにはあらざるべし、『否とよ、そは可なり。其はした